

今年度は、「日本膜学会第46年会」を、2024年6月11日(火)～12日(水)に早稲田大学リサーチイノベーションセンター(121号館)において開催いたしました。昨年は、ICOM2023が開催されたために、年会とシンポジウムの合同大会として行いましたが、本年は通常通り初夏に年会、秋にシンポジウムとなります。参加者は、一般会員102名、学生会員73名、一般参加者20名の合計195名に加え、法人登録5社を数え、さらに企業展示も3社行われ、パンデミック前と比較しても例年通りの規模での完全なオンラインの開催となりました。新規入会者および参加者も増えてきており、学会が発展しているとともに、様々な分野で膜学の重要性がますます認識されていると感じました。私自身は、2013年入会および参加させて頂いていますが、膜学は種々の産業分野に直結する学問であり、産学との距離が非常に近く、またアットホーム感に富む他にあまり類のない稀有な学会と感じており、それは今でも変わっていないと感じました。また昨年同様、参加費を若干値上げさせて頂いたにも関わらず、多くのご参加を頂きましたこと、ご発表、ご参加頂きました皆様に厚くお礼申し上げます。

2日間にわたり、人工膜、生体膜、および境界領域分野で一般口頭発表31件、ポスター発表67件が行われ、活発な議論が行われました。ポスター発表は特に盛況で、ポスター賞対象の有無に関わらず、大変な熱気の中で質疑応答が行われました。これらと合わせて、2件の特別講演と4件のシンポジウムも開催されました。特別講演として、「カチオン性ポリペプチドを基盤とする核酸デリバリー」のご講演を、東京大学の宮田完二郎先生から、また「注射に代わるバイオ医薬品の非侵襲的経皮薬物送達技術-膜学的アプローチによるブレイクスルー-」との題目で、九州大学の後藤雅宏先生からご講演頂きました。世界的に活躍されている先生から、まとまった研究のご紹介を聴くことができるのも本学会の特別講演の特徴であり、予定時間を超え

て質疑応答が続き、大変有意義なプログラムとなりました。

また、より関心の高いトピックに絞って気鋭の研究者らにより講演が行われるシンポジウムが、それぞれの分野で4件行われました。人工膜シンポジウム1「膜による水処理技術を展望するXV～高度膜濃縮技術」、人工膜シンポジウム2「計算化学と機械学習が共創する膜分離プロセスの未来」、境界領域シンポジウム「細胞を解析・制御するユニークな材料化学」、生体膜シンポジウム「曲率膜認識技術と応用研究」が開催されて、これらのトピックの最前線で活躍されておられる多くの先生方からご講演を頂いて、活発な議論がなされました。そして、そのまま討論/議論は懇親会の場合へと続いて行きました。

今回もこれまでの東京開催と同様に、早稲田大学リサーチイノベーションセンター(121号館)での開催となり、会場を確保してくださった早稲田大学の松方先生、酒井先生、および松方研究室のスタッフ・学生の方々のご尽力で、2日間ともスムーズに進行しました。事前の準備から、前日の設営、当日の運営まで、副実行委員長、実行委員の先生方、および膜学会事務局の渡部様のご尽力を頂きました。ここに厚く感謝申し上げます。

**日本膜学会会長：**山口猛央(東京工業大学)

**第46年会実行委員長：**谷口育雄(京都市芸繊維大学)

**副委員長：**中瀬生彦(大阪公立大学)

**実行委員：**太田誠一(東京大学)、佐伯大輔(信州大学)、酒井 求(早稲田大学)、鈴木智幸(京都工芸繊維大学)、田中俊輔(関西大学)、中野 実(富山大学)、南雲 亮(名古屋工業大学)、藤原大佑(大阪公立大学)、森田真也(滋賀医科大学)



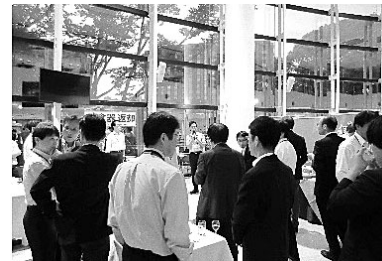
特別講演 宮田先生



特別講演 後藤先生



講演会場風景



懇親会風景